

竜の子 奨学生

TATSUNOKO NEWSLETTER



第20回交流会 (WIRED CAFE NEWS 日本橋三井タワーにて)



Contents

- P.2 一語一会「会計の持つ力」
- P.3 理事長挨拶
- P.4 第19回交流会レポート
- P.6 第20回交流会レポート

その夢は、きっと世界を変えていく
The dream surely changes the world.



(WIRED CAFE NEWS入り口にて)



第19回交流会 (厳島神社にて)

- P.11 竜の子近況報告
- P.14 SPECIAL REPORT I
- P.15 SPECIAL REPORT II
- P.16 編集後記

第11号
Mar.2013


Tatsunoko Foundation

 公益財団法人 竜の子財団

「会計の持つ力」

公認会計士として仕事を行っている関係で数字を扱うことが多いのですが、会計という観点からぜひ知っておいていただきたいことをお話したいと思います。

会計というと苦手の方もいらっしゃるかもしれませんが、数字の力は大きく、これは客観的で他者との比較も可能になることがあると言われてしています。でも、会計は法人・個人の活動を一定のルールで写したものの（写像）であり、ルールが異なると数字が変わってしまいます。不思議に思われるかもしれませんが、日本にはいくつかの会計のルールがあり、どれを使うかによって数字は異なるのです。また、上場会社と中小企業ではルールが異なりますので、どのルールが適用されているかを確認することが重要となります。

では、何が言いたいかというと、①会計の数字は絶対的な真実を表していない、②数字の背後にある実態を意識しましょう、という二点です。この点をぜひ押さえていただきたいと思います。特に、実態をつかむためには、客観的な証拠（evidence）に基づいているかを検討するとよいと思います。

なお、当財団は公益法人会計基準というルールで作成されており、理事長をはじめ関係者のご努力で健全な財政状態ですので、ぜひ一度ご覧下さい。

中村公認会計士事務所

中村 元彦

経歴

中村公認会計士事務所所長、公認会計士・税理士、日本公認会計士協会理事・非営利法人委員会専門委員、情報処理技術者試験委員

主な資格

公認会計士、税理士、AFP、ITコーディネータ、ITCインストラクター、CISA（公認情報システム監査人）、CISM（公認情報セキュリティマネージャー）、公認システム監査人、会計システム専門監査人、公認不正検査士（CFE）



「一語一会について」

竜の子奨学生にとって、財団関係者からの励ましの言葉は、大変貴重なものです。そして、竜の子奨学生には、その言葉は一生に一度の出会いであると心得て、そこから多くのことを学んでほしいという願いを込めて、このコーナーを「一語一会」と名付けました。

理事長挨拶

この度、当財団は平成24年10月4日をもちまして「公益財団法人 秋元国際奨学財団」から「公益財団法人 竜の子財団」へと名称を変更致しました。平成19年4月26日当時の主務官庁であった文部科学省より認可を受けての財団設立以来、奨学財団としては稀有なことでありますが、非常に多くの御支援者に恵まれて財団を運営できて参りました。このような恵まれた環境の中で、公益法人として個人名を冠するのはふさわしくないとの思いから、敢えて私の名前を外すことと致しました。

設立当初より、多くの方々から国際貢献、あるいは財団の運営に貴重なアドバイスを戴いてまいりましたことを、この場をお借りして今一度厚く御礼申し上げます。

財団の設立趣意でもあるアジア諸国との国際交流を通じて、近隣諸国との友好関係を築き、国際理解、国際協調を推進することによる真の意味での国際友好親善に寄与し、ひいては「世界平和」に少しでも貢献できる人材の育成のため、当財団としては、これまでにアジア諸国からの200名を超える私費留学生に対し、奨学金を支給し、日本の伝統文化を直接体験する機会を設けてまいりました。もちろん、人材の育成ですのでこれまでのビジネスとは違い直ぐに結果が表れるものではないかもしれませんが、しかしながら、これを50年、100年続けていくことにより、必ずや国際友好親善ひいては「世界平和」につながっていくものと考えております。

また、私たちは今後、活動の場を「国際交流推進」に留めず、児童養護施設・障害者施設等をはじめとした「児童福祉の充実」に広げて参ります。現在日本では、児童福祉法に基づいていろいろな問題から家庭で暮らすことのできない児童等への施設サービス（児童養護施設、乳児院、母子生活支援施設等）や、保育所における保育サービス、障害児に対する在宅・施設サービス等が実施されている他、少子化の一層の進行や、児童虐待といった新たな課題に対応すべく、「次世代育成支援対策推進法」や「児童虐待防止法」による施策も進みつつあります。

児童福祉は、要保護児童の保護、救済といった限定的な制度から、すべての児童の健全な発達保障へとその対象について変遷をたどってきましたが、これからは、社会・経済状況の変化や価値観の多様化等を背景として子育てを社会全体で支える視点からの制度の充実が必要であり、労働施策等との連携を含めた施策の推進が一層求められています。私たちにできることは僅かかも知れませんが、少しでも児童福祉の向上につながっていくことを目指し活動してまいります。

今後は、アジアの若者と日本の子供たちが、財団を介して直接交流する事により共に刺激しあい、共に手を携えて成長していきます。若者たちが直接交流することにより、国際交流が推進され、ひいては「世界平和」につながっていくものと考えます。

財団役員一同これからは「国際交流推進」「児童福祉の充実」を目標に掲げ、皆さまから頂いたご支援を決して無駄にすることなく「世界平和」に向けて、財団設立の理念を決して見失うことなく、より一層の努力をして参ります。

今後も倍旧のご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

公益財団法人 竜の子財団 理事長 秋元 竜弥

ご寄付いただいた皆さまへ

竜の子奨学生を代表してご支援を頂いている皆様にお礼の言葉を申し上げます。皆様のご支援のおかげで、竜の子奨学生は経済的な心配がなくなり、自分の夢に向けてそれぞれの専門分野での学業に専念することができました。いつも私たちの後ろで見守ってくださり本当に心から感謝しております。いつか私たちが社会に進出し、活躍することになるかと思えます。その時には、ご支援して下さった方々への感謝の気持ちを常に忘れず、周りの困った人には手を差し伸べ、今までいただいたご恩を今度私たちが社会にお返ししたいと思います。

(平成21年度竜の子奨学生 電気通信大学 林 照龍)

第19回交流会レポート

平成24年8月18～19日、竜の子奨学生の第19回交流会——広島研修旅行が開催されました。20名の奨学生と関係者および寄付者の皆様で広島県原爆ドームや、厳島神社などを見学し、身も心も癒されながら歴史から知恵を学びました。

朝8:30発の飛行機で広島空港へ向かい、その途中では久々会う奨学生たちが元気で明るく、交流を楽しみました。

広島空港から昼食会場へ移動するバスの中で、バスガイドさんの案内を聞いて、少しずつ広島のイメージが分かってきたような気がしました。昼食は「お好み村」で、具がキャベツや卵、魚介類、そば、うどんを入れたボリューム満点の広島風お好み焼きをいただきました。



お好み村の「新ちゃん」より

お好み焼きは2千5百年ほど前、孔子が食べていたとされる、「煎餅（せんびん）」というものが、遣唐使船に乗って日本に伝えられました。千利休によって「ふの焼き（うどん粉を水と酒で練り焼いたものに山椒や甘味噌をぬった茶菓子）」として、わび・さびの精神を追求した安土桃山時代に確立された様式美として食されました。そこから昭和初期の「一銭洋食」へと形を変え、洋食化の波に乗りソースを使用するようになって、現在のお好み焼きに至るのです。広島におけるお好み焼きは、この一銭洋食が戦後の悲惨な状況の中、広く食べられるようになったことから始まったと言われています。

戦後、被爆された広島市中心部の新天地広場に集まった50軒ものお好み焼きの屋台に、活気づくこの風景を見た作家のきだみのるさんが、「まるでお好み村みたいだね」とおっしゃったのが「お好み村」の名前の由来です。そして、広島のお好み焼き屋の名前には「〇〇ちゃん」という名前のお好み焼き屋が多いです。これは、戦争で父や夫を亡くした多くの女性が自分の力で出店していたため、女手一つで頑張っている店主の名前が多くつけられています。

昼12:45から平和記念資料館・原爆ドームへ移動しました。この平和記念資料館は「原爆資料館」とも称され、世界最初に原子爆弾で被害を受けた広島を記念するための博物館です。年間百数十万人が訪れ、入館料が50円以下という低価格なのは、ここへ足を運びやすくする為であり歴史の重要性を訴えている気がします。

観覧は東館を入场し、本館から退出する順路となります。



平和記念資料館にて見学

東館には原爆投下までの広島市の歴史、第二次大戦の歴史的背景に関する展示があり、本館では広島原爆の人的・物的被害に関する展示が行われています。例えば、原爆投下直後の壊滅した広島市街地の縮小模型、全身を焼け爛れさせながら火の中を逃げまどう被爆者の等身大ジオラマ、被爆死した三人の動員生徒が身に着けていた制服の残骸を組み合わせると一体の人形に仕立てた「三位一体の遺品」や「黒焦げの弁当箱」などがあります。一番ショックを受けたのは本通の住友銀行広島支店から1971年に移設された「人影の石」の展示物です。戦争の恐ろしさが、映画やドキュメンタリー番組などいろいろなメディアを通じて表現されていますが、この石よりリアルなものはありません。まるで灰になった犠牲者の死の瞬間を感じ取れるような気がして、遠い昔のできことには思えません。悲しみが胸を締め付け、あまりにも堪えなかったので、見学時間を短縮しました。

一方、これらの苦難を乗り越えて、お好み村のような場所が現れ、戦争の跡地において復興の希望がもたらされた広島市民たちへ敬意が生まれてきました。

平和記念館から出て、原爆ドームへと向かいました。原爆ドームは被爆した建物でありながら、広島平和記念碑であり、ユネスコの世界遺産に登録されています。建物は川の側に静かにそびえ立ち、鉄の骨格が露出した部分や、壊れかけた壁など、戦争の残酷さを物語っています。1つの爆弾によって



平和記念資料館から原爆ドームへ移動中に

20万人以上もの人たちが亡くなり、環境が破壊され、生き残った人たちも絶望のどん底だったと思われます。改めて、「戦争とはなにか、なぜ起るのか」を考えざるをえなくなりました。

原爆ドームから離れ、バスに乗っていた時、今の平和に感謝しながら、それらのことを考えました。気づいたらもう宮島へ移動していました。島に上陸して最初に出会ったのは穏やかな鹿たちでしたが、その鹿たちはエサを貰えると思ったのかホテルまで秋元理事長の後ろを付いてきてしまいました(笑)。

戦争の恐怖と宮島の美しい景色と対照的になり、より一層、哀愁が際立っていましたが、触れた空気湿度、温度、匂い、また波の音、砂を踏む音などに癒されました。

夕食は、ホテルの大宴会場を利用し、会席料理を楽しみました。

次に、世界遺産の厳島神社を見学し、潮が下がっていたため、神社の隅々まで歩くことができました。更に、夜に潮が満ちる時、宮島ナイトクルーズの舟に乗って、昼間に歩いた厳島神社の大鳥居を舟でくぐり、神社を海上で鑑賞しました。この奇想天外な発想に感嘆し、静寂の中で時間を忘れ、心を清められました。



秋元理事長が乾杯の音頭を

11:00から、錦帯橋に移動し、この山口県岩国市の錦川に架橋された木造の5連のアーチ橋を見学しました。この錦帯橋は、日本三名橋や日本三大奇橋の1つに数えられており、名勝に指定されています。実際に橋をのぼって歩いてみたら、なかなか広くて急な坂でした。



錦帯橋の前にて、元気ハツハツ

錦帯橋を離れ、昼食の店、元祖岩国寿司の宿、三原家へ移動しました。店は庭園式の古建物で、歴史を感じます。この店で私達は、300年以上続く伝統の岩国寿司という押し寿司を賞味しました。



その場で寿司を作ってくれるので興味津々のハウ君



厳島神社の大鳥居まで歩いてきました！

翌日の朝は清々しい天気の中でロープウェイにて宮島散策しました。ロープウェイ終点にある瀬戸内海が360度で一望できる展望台は、獅子岩展望台と呼びます。その日は晴れていたため、青い瀬戸内海とたくさんの島々が見えました。



いい顔をしている竜の子奨学生たち～世界平和の希望！

今回の広島研修旅行の先は、いずれも大切にしたい自然環境と人文環境で、とても充実した一泊二日の交流会でした。但し、素敵な自然風景や環境より、原爆記念館で受けたカルチャーショックのほうが大きかったです。

原爆も人間の行ないであり、厳島神社も人間の創造であり、結果として悪と善、有害と有益、戦争と平和との対照でしょうか。宮島の生活や建物を見ていると、自然と良好な関係を築いていることに気づきました。テクノロジーの発展は進めば進むほど、私たちの社会に大きく変化をもたらしています。自然の一部である人間はその環境に合わせるように努力をし続けていけばいくほど、不調が現れてきます。自然とは調和、平和であり、戦争とは病的、爆発であると思います。今の時代は昔のどの時代よりも全ての人々が世界平和に向けて努力をし続けなければなりません。

(担当：平成21年度竜の子奨学生 東京藝術大学 班 文林)

第20回交流会・第1回OB会：絆

平成24年12月8日、竜の子奨学生のOB達と現役生が東京日本橋に集まり、記念すべき第一回のOB会が開催されました。懐かしい顔、新しい顔がともに集い、竜の子財団設立以来の歩みを顧みながら、将来についても展望しました。

秋元理事長 開会の挨拶

今日は記念すべき第20回交流会、そして、初めてのOB会になります。12月にこのようにみんなで集まるのは今年一番の楽しい行事になるのではないのでしょうか。今日は1期生から6期生、そして新しい命を授かって、家族ぐるみで来ている方もいます。みなさんとは沢山の交流会を通じて多くの思い出があります。今日もみなさんと一緒に楽しい交流会を作っていきたいと思います。



交流会は理事長の挨拶から始まりました。



絆：大きなファミリー

椎塚理事 閉会の挨拶

私が竜の子財団のお仕事をお手伝いすることになってちょうど4年が経ちました。竜の子財団のみなさんを家族のように感じ、理事長と私はみなさんのお兄さん、あるいは父親のような存在になりたいと思っています。家族という絆があれば、必ず当財団の理念である「世界平和」に繋がっていくのだと信じています。家族ですので、時には怒ったり、時には泣いたり、また時にはみんなで笑ったり、というようなことが多くあります。みなさんの中にはこれから社会に出る方、または既に社会に出ている方もいます。これから先、人生長くあり、辛いことも楽しいこともいっぱいありますが、辛いときには休む事が大事だと思います。ただ、辛くて休んでいるときには、皆さんにはこれだけの家族がいるのだと思い出していただければ嬉しいです。これからはこの家族の輪をどんどん大きくしていき、さらにその先にはきっと「世界平和」に繋がっているのだと信じています。これにはみなさんのご協力も必要です。



会を楽しむ懐かしい顔ぶれ

竜の子財団が設立してから6年となり、支援を受けたアジア12カ国の留学生はのべ205名にのぼります。近年、OB会の開催の声も高まっておりましたので、念願の開催は竜の子奨学生にとって先輩とのいい交流の場となりました。

卒業生達は竜の子財団を旅立ってから、日本で就職し留学して得られた専門知識をフル活用したり、自国に帰って日本と中国の架け橋のような通訳になったり、幸せな家庭を築いたり、みんな自分の夢に向かって確実に進んでいます。しかし、夢が実現した人もまだ努力の途中の人も竜の子財団を忘れていません。OB会で一番多く聞こえた言葉

は「その時、竜の子財団の支援があったから。」でした。

人生には様々な段階があり、誰も今日を積み重ねて明日を創っていくのです。いつか私達も誰かを助けを与える機会が訪れたとき、自分が困難な時に竜の子財団に出会えたことをありがたく思い出すでしょう。

今回の第20回交流会はOB会も兼ねているため、奨学生だけの会となり、和やかな雰囲気にも包まれていました。すでに就職した先輩達との交流も在学学生にとって有益な経験となりました。竜の子財団を通して築いてきた絆はより一層深くなったのではないかと感じられます。

(担当:平成21年度竜の子奨学生 明治大学 周 思思)

OB・OGからのメッセージ

竜の子財団卒業生の皆さんはご支援していただいた皆様のおかげで経済的に問題がなく、自分が好きな分野の研究や学業に専念することができました。また経済的な面での支えだけではなく、交流会に参加し様々な人と接し、学業以外のこともたくさん学びました。その経験は現在の仕事や社会生活にも役立っていると思います。現在どんな夢に向かって社会でご活躍されているかについて、今回のインタビューで、「①現在、何をしているのか ②竜の子財団で学んだことがどう活かされているか ③現在の夢は何か」の三つの質問をしました。

朴 敬玉

(中国・吉林省延吉市)

一ツ橋大学卒業



- ① 一橋大学社会学研究科に特別研究員として研究しながら、文教大学、関東学院大学、東京造形大学という三つの大学で非常勤講師として務めています。
- ② 竜の子財団に入って国を超えて人との絆の大切さを学びました。自分は少しでも世界平和のために力になればいいと思います。できれば今の授業の中で語学だけではなく、学生に中国の現状を伝えて理解していただけるように努力しています。日本人の友人を故郷に案内したり、自分の家族を巻き込んで国際交流をしたりなどをして、日本と中国の間で少しでもお互いに理解しあえるように頑張っています。
- ③ 直近の夢として、去年発表した博士論文を出版することです。将来的には、大学で教育者として日本の若い学生が中国をより深く理解できるように頑張っていきたいと思っています。また、研究者として日本、中国、韓国でお互いに理解できるいい論文をたくさん書きたいことと、母国にいる経済的に困難な子どもを支援したいと考えています。

郭 甜甜

(中国・遼寧省瀋陽市)

東京海洋大学卒業



- ① 現在、M&Aアドバイザーとして活躍しています。具体的には、企業を買収するときに、契約が成立するまでの一連のアドバイスをする仕事です。
- ② 竜の子財団に入って日本社会のルールについて学びました。この経験は社会に入った後、とても役に立っています。
- ③ 今の仕事を通してたくさんの経験を積んでいって、10年以内に自分の会社を持ちたいと考えています。

張 沖

(中国・浙江省平陽県)

立命館大学卒業



- ① 現在、日中ビジネスの仕事をしています。日本の企業で社員として活躍しながら、中国の広州で微生物の会社を経営しています。
- ② 竜の子財団の活動を通して日本社会および日本文化について深く理解することができました。それは現在の仕事につながっていて役に立っていると感じています。
- ③ 将来の夢は、中国の環境を変えることです。

魏 登輝
(中国・河南省)

東京外国語大学卒業



- ① ジールという会社で努めています。主に、日本の中古のトラクターや重機などを海外に向かって販売する仕事です。
- ② 竜の子財団で世界各国の奨学生との交流を通して、たくさんの異文化に接して異なる文化について勉強になりました。それは、今やっている海外向けの仕事に役に立っています。
- ③ 現在、努めている会社はまだ中小企業です。これから、会社の事業をどんどん拡大させて世界進出という目標に会社ともども一緒に成長していきたいと思います。また、今まで竜の子財団の方々に助けていただいたように、ほかの人を助けたいと考えています。

王 宇飛
(中国・遼寧省瀋陽市)

東京大学卒業



- ① 現在、東京大学薬学研究科修士2年生です。今年の3月に日本企業に就職することになっています。
- ② 竜の子財団で学んだ一番大きなことは「人との出会いを大切にする」ということです。人との出会いは本当にとっても貴重なものだと感じています。こんな大きな世界で皆さんと会えることは中国の言葉で言いますと、とても縁があります。奨学生の皆さんと財団関係者の方々と学業以外のことをたくさんお話しができて、本当に勉強になりました。これからも「一期一会」という言葉を感じながら人と接したいと思います。
- ③ 自分が持っている才能をできるだけ発揮して社会に貢献していきたいと考えています。

楊 志剛
(中国・河北省故城県)
日本大学卒業



- ① 現在、理化学研究所の横浜研究所植物科学研究センターで稲などの植物の成分を研究しています。
- ② 竜の子財団で夢に向かってあきらめず努力することと、人との絆を大切にすることということを学びました。それらの経験を今の研究の仕事で活かしています。
- ③ 将来大学の先生となり、日本と中国の架け橋として日中の共同研究をしたいと考えています。

CHOWDHURY ISHTIAQUE AMIN
(バングラデシュ・ガジプール県)
立命館アジア太平洋大学卒業



- ① 現在、薬剤会社であるバクスターのファイナンス部門でファイナンシャルアナリストとして活躍しています。日本国内および中国の企業にファイナンスの予測などのお仕事をしています。
- ② 竜の子財団のおかげで大学時代にアルバイトをあまりせず、学業に専念することができました。
- ③ 3~5年後、母国に帰り、日本の教育システムを母国に導入し、母国の教育事業に貢献したいと考えています。

ヌルメメット 依克山
(中国・烏魯木齊市)
明治大学卒業



- ① 現在、一橋大学大学院経済学専攻の修士2年生です。今年の3月に卒業するので、修士論文を頑張っています。
- ② 竜の子財団で人と交流するときに殻を破ってお互いに理解しあえるということを知りました。
- ③ 今の自分をさらに成長させて将来母国に帰り、日本で学んだ知識や技術などを生かして貢献したいと考えています。

宋 昌錫
(韓国・龍仁市)
東京大学卒業



- ① 現在、建材メーカーで木造住宅のために新しい建材商品を開発しています。
- ② 竜の子財団で多くの人との交流する経験を生かし、仕事以外の時間を使って東京大学卒業生の同窓会で活躍しています。
- ③ 日本の企業で多くの経験を積んで将来母国に帰り、母国の建築事業または教育事業に貢献したいと考えています。

黄 艶
(中国・遼寧省瀋陽市)
日本大学卒業



- ① 現在、日立化成テクノサービスという会社に勤めています。具体的に、車の部品関係の材料の研究開発の仕事に携わっています。
- ② 竜の子財団から卒業して3年経ちました。毎回このような交流会に参加したとき、皆さんと久々に会い、頑張っている姿を見て刺激を受け、そのエネルギーを頂いて自分も頑張っていこうと思うようになりました。
- ③ 現在の仕事は、技術者としてやっていますが、まだ未熟なところがたくさんあります。今後もさらに成長に向かって頑張っていくことと、自分が頑張ることによって多くの人の役に立てれば良いと思います。

劉 彦平
(中国・山東省)
一橋大学卒業



- ① 複合機関連の会社である富士ゼロックスに入社して4年経ちました。最初の約3年間は中央調達部に配属されて、弊社の部門や中国現地のスタッフなどとコミュニケーションを取りながら部品調達の仕事をしました。2012年の10月からは営業部門に配属されて、外資系の営業を担当しています。
- ② 竜の子奨学生としての経験は、自分にとってとても貴重な経験でした。竜の子財団のご支援のおかげで学業に専念することができて、本当に心から感謝しています。また、行われた様々な交流会は自分の視野を広げてくれて本当に良かったと思います。
- ③ 現在、仕事をしながら育児をしています。仕事と育児の両立を実現したいです。将来的には、日中関係の仕事に携わりたいと考えています。

馬 耀
(中国・遼寧省大連市)
筑波大学卒業



- ① 大学で非常勤講師として中国語と日本文学を教えています。
- ② 竜の子財団で様々な国から来た奨学生と交流した経験を通じて、今は大学で日本人の学生に国際交流の素晴らしさを伝えています。
- ③ 個人的には現在の生活に満足しているので、世界がもっと平和になってくれれば良いと思います。

質問の内容：①現在、何をしているのか ②竜の子財団で学んだことがどう活かされているか ③現在の夢は何か

羅 宏勝
(中国・広西省)

慶応義塾大学卒業



- ① 東京でエンジニアの仕事をやっています。
- ② 竜の子財団で異なる文化から来た多くの方と交流することを通じて、「当たり前なことを当たり前だと思わない」ということを学びました。それは、現在のお仕事の役に立っています。例えば、お客さんと交流するときは、自分の考えだけではなく、お客さんの立場から考えてうまくコミュニケーションを取っています。
- ③ 秋元理事長を目標にして、自分も竜の子財団を発展させたいと考えています。

ISLAM MOHAMMAD ZAHIDU
(バングラデシュ・DHAKA)

電気通信大学卒業



- ① 通信会社であるNTTドコモに務めています。具体的に、スマートフォンの3Gネットワークの開発やNTTネットワークの運用などの仕事をしています。社会人になったら一人で働くのは少なく、グループで動くことが多いと感じています。
- ② 竜の子財団でのグループワーク経験は、今の仕事上で役に立っています。また、奨学生一人一人に夢を持たせるのは良かったと思います。それは会社に入ってから自分の夢にも参考になっています。あと、前回の交流会で「感謝の気持ち」はとても大事だということがわかりました。自分は通信業界にいるのでお客さんは目の前にいないことが多いのですが、お客さんに感謝の気持ちを持ちながら仕事をするのは重要だと思います。
- ③ 将来、世界に名前を残せるように、ネットワーク関連の商品を開発して人々の生活に役に立ちたいと考えています。

蔡 碧月
(台湾・台北市)

筑波大学卒業



- ① 特許事務所で翻訳と通訳の仕事をしています。
- ② 竜の子財団でどのような苦しいときでも絶対にあきらめられないということを知りました。それは今の仕事でも自分の人生でもとても役に立っています。
- ③ 今の夢は、二人の子どもを将来世界平和に貢献できるような人間に育てることです。

陳 悦
(中国・鎮江市)

名古屋大学卒業



- ① 現在、IBMで務めています。主に会社で最先端の技術を活かしながら、ソーシャルメディアという情報源を使ってお客さんのマーケティングの調査および今後の戦略をサポートするプロジェクトをやっています。
- ② 竜の子財団のおかげで、日本の方々だけではなく、アジアの様々な国の方々と交流することができて、お互いの立場でものを考えて、どのように異なる文化の方々とコミュニケーションするかを学びました。それは、今の会社でグローバルな仕事をする時に役に立っていると感じています。
- ③ 将来、竜の子財団の寄付者となり、財団を発展させたいと考えています。



(担当:平成21年度竜の子奨学生 電気通信大学 林 照龍)



竜の子近況報告



Pittsburghで有名な夜景場所で友達との撮影
(左が本人です。)

金 兌炫 (韓国・ソウル)

京都大学大学院 工学研究科
機械理工学専攻

「更なる日本から飛び立つ世界：アメリカへの短期留学」

昨年、竜の子財団の奨学生になってからすぐ文部省の若手研究者海外支援プログラムに推薦を貰い受けることになりました。その結果、合格をいただきました。さらに、感謝すべきことに、8月末から12月末まで日本政府からの支援を貰ってアメリカの大学へ留学することになりました。

アメリカに渡って最初の数週間は、アメリカでの文化の違いに驚き、韓国と日本とは違う異文化の人々の中で少しの戸惑いを感じました。しかし、さらに生活してみると、研究室の仲間や宿泊家の仲間から、色んな人や場所を紹介して貰い、色んな所に行き、色んな人々に出会い色んな会話ができて、沢山知り合いが出来ました。

自分の研究面に関しても、自分で計画していた研究内容を留学先の先生から承諾を得てそれを始めることになり、自分の研究にもっと力が入り頑張っています。

私はアメリカに来ることで、もっと多くの財産を増やすことが出来ました。



沖縄の海と空

朱 震 (中国・陝西省西安市)

京都大学 経済学研究科
経済学専攻

「就活をしながら生活を満喫しています。」

昨年の夏休みの始まりと共に、私の就職活動も開始しました。

就活をしながら、色んな人から悩みや悔しいことを聞きました。そこで、就活の難関と言えるグループ・ディスカッションに着目して、私は学部の授業を傍聴した時に会った仲間と一緒に、「日本人学生×留学生のグループ・ディスカッション練習会」を作りました。今は20人以上のメンバーで、一緒にスキルを鍛え上げていて絶好調です。

勉強や就活だけでは生活のバランスが良くないと思います。そこで、私は夏休みの時間を使って頑張ってアルバイトをしていました。後期の学費はもちろん、旅行の経費も確保できました。頑張った自分へのご褒美とこれからの戦いを備えて、リフレッシュとして沖縄に行きました。夏の終わりに、沖縄で残暑を吹き飛ばしました！

あの絵のようにきれいな街に、もう一度行きたい、いや、必ず行きます。



チベットの布达拉宮の前にて

杜 銘雨 (中国・山東省)

立命館アジア太平洋大学
アジア太平洋マネジメント学部

「実家での生活を満喫しています。」

私は昨年9月に卒業して、10月から今年の4月まで、一時期日本を離れて、中国に戻っています。今は、社会人になる前の貴重な“長休み”を満喫しています。高校から大学までは親と一緒にいる時間がとても少なかったため、この数カ月の時間を格別大切にしています。10月中旬には青海省の西寧からチベットを経て四川の成都に行きました。

また、入社する前の準備を怠けられません。システムエンジニアの仕事について全く知識がない自分は習うことが山ほどあります。今はITの基礎知識や簡単なプログラミングの独習に取り組んでいます。それから、助手として子供にバイオリンを教えに行ったり、家の近くのダンスクラスに通ったりしています。



授業の前に一枚！
今日も頑張ろう！

金 丹 (中国・黒竜江省)

名古屋大学 教育発達科学研究科
教育科学専攻

「修論頑張っています！」

わくわくしながら来日してもう2年が過ぎ、そろそろ修士課程も一段落！

最近では修士論文の執筆に専念しています。中間検討会の準備で大変ですが、2年間の研究がこれで終わると思ったらなんだか寂しくなります。自分が何を話したかったのかも忘れるほど緊張していた最初の発表も、研究室の先輩や同級生に励まされながら書いた最初の研究ノートも、今更考えてみると本当に大切な経験でした。研究が大変でつらい時もありましたが、いろいろな経験を経て自分が成長したことが修士論文を書きながら実感できます。続けることが一番大事だと思います！研究だけでなく、これからの人生のなかでも、辛いから、大変だからといって諦めるのではなく、ぶつかりながらやり続けたいです。未来の私に「その時は頑張りましたよ」と堂々と言えるように！



大阪の国際柔道親善交流大会にて

王 皓 (中国・遼寧省)

東海大学 武道学科
柔道専攻

「一生懸命頑張る。」

お元気ですか。この写真は昨年11月25日に大阪の国際柔道親善交流大会で優勝した時のものです。昨年、私は全部で4つのチャンピオンを獲得しました。しかし、残念ながら、様々な原因があって、オリンピックに参加しませんでした。次のチャンスを是非挑戦したいです。私は東海大学の代表として、全日本大学生団体試合にも参加しました。しかもチャンピオンを獲得して、同時に日本の記録を打ち破りました。とても嬉しいです。なおも、私は努力しており、日本語はまだまだですが、いまからでも文武両道を目指します。竜の子財団にいただいた恩と細やかな愛を得て、心から感謝します。これからも日中の架橋に成るように一生懸命頑張ります。



学会での口頭発表

張 愚 (中国・太原市)

九州大学 言語・文学専攻
国語学国文学専修

「ガラパゴスからの脱却」

昨年の11月に、日本語学会2012年度秋季大会で口頭発表しました。学会の最新動向を把握するためには、自分以外の発表でも「他人事」扱いはいけないと思って、他の発表も聞きました。発表を聞いて気付いたのは、最近では、医療・社会学などの他分野の視点から日本語の真相を解明しようとする研究と、これまでの日本語に関する研究成果を利用してそれらの分野に貢献しようとする研究が見られるようになったということです。従来の日本語学研究（伝統的な国語学研究）といえば、ガラパゴス諸島生息のゾウガメに似ていて、鈍重な足運びで独自の進化を遂げつつあるものの、他の種（他の分野）との接触は少なかったという印象を拭いがたい（無論、国語学の研究も、文芸研究の補助的な役割を果たしていた時代がありました）が、これからは、その袋小路に行き詰まった感のある従来の研究状況を打破すべく、新たな視点に基づく研究が期待されるでしょう。



Samuel-Heinicke
ろう学校の正門

金 恩河 (韓国・蔚山市)

筑波大学大学院 人間総合科学研究科
障害科学専攻

「ミュンヘンで研修を受けました。」

12月9日から12月23日まで、ミュンヘン大学が主催する研修に参加しました。ミュンヘンの町は白い雪とクリスマスマーケットですごく綺麗でした。この研修では、ババイアン州のろう学校や職業訓練学校を見学とミュンヘン大学の博士課程の学生とお互いの研究発表をしました。ドイツは人工内耳手術が進んでいるところで、これから日本も韓国もこの道を歩むだろうなと思いました。また、ろう学校もすごく印象的でした。子どもにできるだけ多くの経験をさせようとする方針が肌に伝わってきたし、職業訓練学校では1人の学生が一人前の職員になれるまで支援するシステムが徹底的で感動しました。今回の研修を通して自分の視野も広がったし、研究に対するモチベーションもすごく高くなりました。自分が今やっていることはすごく小さなことだと思っていますが、世界は繋がっているから、いつか自分の研究もここでも役に立つように頑張りたいと思いました。



マレーシア、日本、韓国の大学生の仲間と一緒に
韓国の伝統料理のキムチを作っていた私
(右から2番目が本人です。)

農 思航 (中国・広西省柳州市)

名古屋大学 文学研究科
日本文学専攻

「日韓大学生学術交流プログラム参加報告」

昨年の夏、名古屋大学文学研究科の提携大学の韓国国立木浦大学が主催する日韓大学生・大学院生国際学術交流プログラムに参加しました。日本、韓国、マレーシア、台湾、中国といったアジアの国・地域の大学生たちときちんと交流でき、歴史や文化などの面において日本や中国と緊密な関係を持っている韓国についても理解を深めました。韓国に滞在した三週間は、2012韓国麗水世界博覧会の見学に行ったし、韓国の伝統文化についても理解を深めました。たとえば、茶道、テコンドー、伝統料理などです。その中に一番印象に残っているのは、一泊二日のテンプル・ステーションという企画です。日がまだ明けないうちに起きて、お寺の高僧に従って百八回神仏を拝み、真っ暗な森の中を歩き、水の流れる音や鐘の音に耳を済ませた中、心が柔らかく清らかになりました。プログラムの最後には、日韓大学院生研究集会にも参加して、修士論文の構想発表もしました。実り多くとても有意義な夏を過ごしました。



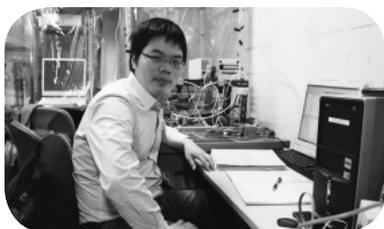
来日した『皆のためのピザ』の監督や俳優たちと共に！
(左端が本人です。)

李 丞孝 (韓国・ソウル)

東京藝術大学 音楽研究科
芸術環境創造 博士課程

「韓国招聘公演を企画しました。」

12月6日～9日に、横浜の関内駅にある十六夜吉田町スタジオにて、韓国招聘公演『皆のためのピザ』の上演やインスタレーションが行われました。十六夜吉田町スタジオは小さいアートスペースで、私がディレクターをサポートするドラマトウルクを務めているところです。今回の公演では私が最初から企画と制作を担当したのでとても忙しかったですが、その分非常に有意義な時間を過ごせて色々な勉強にもなりました。作品は北朝鮮をテーマとしており、普段あまり知る機会のない北朝鮮の事情について観客と話す時間も沢山あったので、日本と朝鮮半島の問題について色々と考えさせられました。公演を準備する間にこの作品を主題として初博士論文も書いたのですが、これからも研究と現場の実践共に頑張りたいと思います！



空気圧サーボ系の制御実験中

「充実した研究生活」

私は機械を自由自在に制御することが好きで、大学院で空気圧サーボ系の精密制御を修士論文のテーマとして研究を行っています。しかし、制御理論は抽象的で、空気圧システムも複雑で、初めの頃研究は全然進むことなく、失敗ばかりでした。そこで、私は諦めたら自分の夢も終わりだと思って、アルバイトもやめて、休日も休まずに全力で研究に力を入れました。日々努力した結果、空気圧サーボ系は思った通り制御できました。現在、私は今までの成果をまとめ、良い修士論文を書いて順調に卒業できるように、毎日精一杯頑張っています。この二年間は非常に充実した研究生活を送り、大変でしたが、これから社会に出る私の糧になるものだと思います。

竜の子財団からの経済的及び精神的な支援がなければ、私は研究に集中できませんでした。今まで温かく応援していただいた方たちに心から感謝します。

王 悦来 (中国・河北省保定市)

東京工業大学 総合理工学研究科
メカノマイクロ工学専攻

「研究室と就職活動」

研究室で、企業の方に来て頂き、実際の仕事と同じような作業をしています。今は、グループでウェブとスマートフォンで動くアプリケーションを作っています。私の他、英語を全く喋れない日本人3人、日本語を全く喋れないフィンランド人1人とインドネシア人2人のグループです。通訳や意見交換をするなどの架け橋役をして、プロジェクトマネージャとして今回のプロジェクトをリードしています。グループで仕事する時の大変さやコミュニケーションのやり取りが、とても勉強になります。あともう1つ、就職活動を始めました。情報を色々調べ、就職フェアや企業の説明会に参加しています。企業についてまだ詳しくない私にとって、身近な人達のアドバイスが心強いです。11月、授業中にバスケットボールで肩を痛めて病院へ通いました。これで「厄年」はもう終わると思うので、あとは残りの学生生活をもっと楽しんで、就職でも良い報告ができるように頑張ります。



通訳ボランティアで

マハルジャン スニル (ネパール・KATHMANDU)

東京電機大学
情報環境学部 情報環境学科

「学会参加報告」

私は、学会発表や博士論文を頑張っています。11月末、香港城市大学で学会発表に参加してきました。発表内容について、学会の参加者からいろいろ有益なアドバイスをいただきました。今回発表した内容は博士論文の一部なので、いただいた意見を検討した上で、博士論文に追加でき、論文の修正にとっても役に立ちました。閉会后、香港の風景もちょっと観光してきました。すばらしい夜景に感動しただけではなく、中国の内陸と異なる社会習慣や食文化などにも驚きました。自分にとっても異文化体験とも言えることができます。異なる文化背景を持つ人々がうまくコミュニケーションをとれるために、言葉だけではなく、相手の文化を深く理解することが重要だと改めて実感しました。これからは異文化コミュニケーションに関するテーマを研究しつづけていきます。



閉会后、学会開催地の香港城市大学の正門にて

王 俊紅 (中国・佳木斯市)

北海道大学 大学院教育学院多元文化
教育論講座博士後期課程

SPECIAL REPORT I

● 函館からの願い ●

皆さん、韓国ドラマを見たり、韓国料理を食べたりしたことがありますか？日本では韓国ドラマをはじめ、K-popや韓国の食べ物などが人気です。私は来日して、最初は大阪、その後札幌、現在は函館で生活しています。だんだん田舎の方に移っていますが、どこに行っても多くの日本人が韓国文化に興味を持っていることが分かりました。これは私にとって本当に喜ばしいことです。なぜなら、韓国に興味を持っている日本人と交流ができ、韓国を伝える機会が増えたからです。

私は函館で韓国語講師のアルバイトをしています。最初は講師の経験がなかったので、教えるのが難しいと思いました。たとえば、自然に身に付いた韓国語の発音をどのように説明すれば良いか分からなかったのです。あるときは、生徒さんから最近の韓国ドラマやアイドルについて声をかけられましたが、何も分からなくて困ったときもありました。しかし、2年くらい経った今は少しずつ教えるコツを掴み、楽しみながら教えています。

大学生活以外の場である韓国語講座で色々な活動をはじめ、人間関係を広げています。みんなの韓国語のレベルを上げることが一番ですが、他に何か楽しいことができないかと思いました。そこで、函館には韓国料理店があまりないので、韓国料理を食べる機会が少ないことと、私が韓国で調理専攻をしていた経験もあり、料理教室をすることにしました。最初は韓国を代表とするチヂミ、ビビンバ、ミソチゲなどの家庭料理を紹介しました。久しぶりに10人前くらいの料理を作ったときは、準備するのに大変慌てましたが、みんなと協力して料理を作るときは楽しかったのです。初回の料理教室が生徒さんに大好評であり、みんなが韓国により親しみを感じた良い機会でした。そして、自分の家で簡単に韓国料理を作って食べたという話を聞いたとき、やりがいも感じました。韓国で調理を学んだ経験が日本に来てこのような形で役に立ち、私はとても嬉しかったです。このように私は韓国語や韓国料理を教えることにより、日本人との交流を深めています。週一回で大したアルバイトではありませんが、私は授業以上のことを学んでいます。



韓国の家庭料理

現在、私が住んでいる函館は海産物が豊富な港町であり、観光地として有名です。函館は1859年日本初の国際貿易港と

して開港した記録があるように、北海道の中で一番早く西洋文明を受け入れました。このため、函館には独特な町並みや異色な建物が多く、伝統ある店や古い雰囲気のロマンチックな喫茶店が多くあります。特に、函館山から見える世界3大夜景は旅行するのなら見逃してはならないです。この函館が、日本で一番行きたい観光地として韓国人に紹介された時期もありました。しかし、2年前の東日本大震災以来日本に来る韓国人観光客は少なくなりました。さらに、最近は領土問題などで両国の外交関係が悪化しつつあります。これらの影響で韓国から函館間の直行便が運休になったそうです。函館で生活している私には少し残念な知らせでした。そこで、日本や函館の魅力を知って欲しく、函館の美しい町並や情報をブログに載せて韓国語で紹介しています。

韓国と日本はお互い一番隣接している国です。昔から様々な文化交流をし、2002年度はサッカーワールドカップを共同開催したこともあります。しかし、両国が友好関係になるための努力はいまだに求められている課題だと思います。小さいことであるけれども、私は函館で韓国語を教えたり、韓国料理を紹介したり、あるいはブログを用いて函館の名物を韓国人に紹介したりする活動を通して両国の関係が少しでも円滑になるように願っています。



韓国講座の生徒たちと私（本人右上）



函館の美しい街並

(担当：平成22年度 亀の子奨学生 北海道大学 李 大英)

SPECIAL REPORT II

● 2012年10月5日 第十回ユネスコ記念能を観劇して ●

平成23年度竜の子奨学生 東京藝術大学音楽研究科 芸術環境創造博士課程

李 丞孝

舞踏・劇・音楽などさまざまな要素を取り入れた「能」と、五穀豊穡を祈る民俗芸能や物まね芸能の猿楽などが融合して成立したといわれる「狂言」。能と狂言を含める能楽は、約650年の歴史を持ち、先祖から子孫に、あるいは師匠から弟子に一度も切られず伝承されてきたとされています。そのような舞台芸術は世界にも唯一と言っても過言ではないので、ユネスコは能楽を第1回の『人類の口承および無形遺産の傑作』に指定しました。それを記念する為に毎年ユネスコ記念能が国立能楽堂で行われていますが、公益社団法人能楽協会からご招待いただいたお陰で、竜の子奨学生たちと共に初の能体験が出来ました。

私は以前から見たかったのでとても期待していたのですが、少し心配もありました。歌舞伎は初心者が見ても分かりやすいけれど、能楽は日本人でも理解がなかなか難しいということを知ったからです。そのような期待と心配を竜の子奨学生たちと共有しながら国立能楽堂に入場しましたが、一般的な劇場の舞台と異なる能舞台という独特な舞台があることを初めて知りました。演者の舞が行われる「本舞台」は三間(約5.5メートル)四方の正方形で、正面から見ると右側に客席の方に突出しており、その右には一種の合唱団とも言える地謡(じうたい)が座る「地謡座」がありました。本舞台の後ろには楽器を演奏する囃子(はやし)と舞台進行の役割をする後見(こうけん)が座る「後座」(あとざ)というところがあり、そこから斜め右に演者の入退場が行われる「橋掛り」(はしがかり)が繋がっていました。能舞台はこの四つの部分に分けられ、客席は本舞台の正面と左から番組(能楽のプログラム)を観る形になっていますが、普通の劇場とは違って幕がないのも独特でした。

能楽の作品は現在も200編以上伝承され上演されているそうですが、第10回ユネスコ記念能で上演されたのは、狂言の『柿山伏』(かきやまぶし)と能の『殺生石』(せっしょうせき)でした。『柿山伏』は、柿を食べに木に登った山伏が畑の主人にばれてしまい、殺されないために色んな動物の鳴きまねをします。結局木から落ちた山伏は腰を打ち、帰ろうとする柿主を祈りの力で戻しますが、柿主は看病のために家に連れて帰ると騙して最後は投げ出すという物語でした。山伏が柿を食べる様子や色々な物まねをすることが面白く全体的に分かりやすかったので、外国人が見ても十分楽しめると思

ました。

能の『殺生石』は、修行者の玄翁が人に害を与えているとされている殺生石に出会う物語でした。その石は昔退治された妖狐の魂が入っており、玄翁が成仏させるために引導を授けます。すると、割れた石の中から精が現れ、これからは悪いことをしないと誓ってから消えるという内容でした。席の前についている字幕とパンフレットに書いてあるあらすじがあったので理解はできましたが、歌のように喋る台詞が多く、しかも殆どが古語だったので聞き取ることが難しかったです。内容以外にも能面(能で使う仮面)と衣装が華やかで見どころだったのですが、途中で石が割れるシーンでは舞台上で衣装が変わったりもして、昔の人々が楽しんだ伝統的な特殊効果だとも思いました。また、能面を使う能は顔の表情で演技をすることが出来ないなので、頭の角度を調節して能面の表情を表すと学校で学んだことがありましたが、そのような細かいところまで身に着けるために俳優たちが続けている努力も実際に感じる事が出来ました。

初めて能を観劇して難しいところもありましたが、日本固有の伝統文化を体験することができ非常に有意義な時間でした。私は現代芸術を勉強していても伝統に接する機会はありませんが、これから能だけでなく歌舞伎や文楽のような他の伝統芸能も観劇してみたいと思いました。このような機会をいただけるようにご招待して下さった公益社団法人能楽協会や、竜の子財団を支援して下さる方々に感謝を申し上げます。



©公益社団法人能楽協会
能「殺生石」山中一馬

編集後記

委員長 電気通信大学 リン キリュウ 林 熙龍

2年前に会報誌に参加したことがあります。当時の私は、自分が担当した部分だけしか考えていませんでした。今回委員長を務めさせていただいたので、自分が担当した部分だけではなく、他の委員とコミュニケーションを取りながら、進捗状況を把握しなければなりません。少し大変だと感じましたが、学業以外のことをたくさん勉強することができ、いい経験になったと思います。また、「OB・OGへのインタビュー」を通して徐々に奨学生の皆さんとの交流を深めることができ、とてもうれしかったです。

最後に、編集委員の皆様、この貴重な機会をくださった竜の子財団の方々にご指導してくださったプロの方に感謝の気持ちを申し上げます。本当にありがとうございました。

副委員長 明治大学 ショウ シンシ 周 思思

今回会報誌の編集に参加させていただき、ありがとうございました。

複数の編集者による異なるテーマからなる雑誌は、読む人だけでなく、作る人にとっても楽しい過程だと感じました。写真一枚一枚、文章一句一句にも、それぞれの個性があふれていて、このように編集者になれる機会が本当に素晴らしいと思いました。

ぜひ、私達の作品を楽しんでください！



第2回編集会議の様子

第1回編集会議の様子

委員 東京藝術大学 ハン ブンリン 班 文林

皆さん、会報誌をここまで読んでいただき、ありがとうございます。以前、第5号の会報誌の編集委員になったことがあり、当時も今回と同じく、交流会のレポートを担当していました。もう一度広島研修旅行の資料を掘り出して、その一瞬一瞬の思い出をまとめてみて、まるで脳にあるメモリーを整理しているように、さらに新しい発見がありました。また、皆さんと一緒に新しい分野を経験し、更なる成長を遂げた（パワー・アップかな 笑）と実感し、実に楽しい編集期間でした。

最後に、編集にかかわっていた編集委員の皆さんに：「お疲れさまでした！」、写真を提供いただいた皆さんに：「（感謝の気持ちを込めて）写真を使わせていただきました」と伝えたいです。また、新しい竜の子奨学生たちもぜひ編集委員になってみてくださいね！

委員 北海道大学 イ デヨン 李 大英

今まで竜の子奨学財団の会報誌を読む立場でしたが、今回の2013年11回会報誌に編集委員として参加させていただきました。作文が苦手であり不安でしたが、順調に進められるようにリードしてくれた編集委員会の皆さんに感謝します。今回の編集会議を通して、2012年に行った交流会をじっくり思い出しながら、楽しかった事や竜の子財団の皆様のメッセージで、再び心の安らぎを感じました。このように会報誌を作成し、竜の子奨学財団の活動を記録することに役立つことが出来て、うれしいです。

最後に、竜の子財団を支えてくださる寄付者様とスタッフ様、そして仲間になってくれた竜の子奨学生、皆様に感謝いたします。



第3回編集会議を終えて

「その夢はきっと世界を変えていく」

夢 希望をかなえる為 僕たちは生きている
 その夢はきっと世界を変えていく 平和のため
 いろんな事があるけれども どんなときでも

作詞：竜の子奨学生

作曲：班 文林（平成21年竜の子奨学生）

仲間とともに乗り越えて 竜の子の誇りを胸に
 夢 希望をかなえる為 みんなは生きている
 その夢はきっと世界を変えていく かならず